

まえばし
地下
マップ
上川淵地区

前橋市教育委員会事務局 文化財保護課
Tel.027-280-6511 令和4年2月発行

Digitized by srujanika@gmail.com

古墳群を造った人々

熊川島端（ぬでじまかわばた）遺跡では、3世紀後半に噴火した浅間山の降下物に覆われた水田跡が見つかりました。これは、八幡山古墳、前橋天神山古墳の築造時期に先駆けており、水田耕作を経済基盤として、古墳が造られたと考えられます。水源に乏しかった本地域において、水田経営を可能にしたのは、広瀬川底地帯を流れていた古利根川から前橋台地上に引水する技術でした。ちなみに、5世紀末の渋川市の中井東裏（なかいひがしろ）遺跡の「甲（よろい）」を着た古墳人」は、九州大学の人骨分析によると、渡来人の顔立ちをしているようです。これは、近畿・北部九州の古墳人に見られる特徴だといいます。すでにこの時期から、ヤマト王権の進出があつたものと考えられます。



堅穴住居（左）・高床式倉庫（右）の模型
（国立民族学博物館所蔵）



甲を看た古墳人と苗飾りの古墳人復讐像

割地里界

古墳時代は、地形を利用した水田経営が営まれていましたが、奈良平安時代になると、「都市計画」の範囲開発が行われました。前橋台地上には約109m四方の正方形を基本単位とする千里堀基にに基づき、大規模な水田開発が行われています。これに伴い、古利根川の水を引き入れ、前橋台地上に行き渡らせる用水路網が整備されたと考えられます。宮川、櫛鳥用田・端氣川・藤川などが、用水路として想定されます。



昭和 22 年の上川源地区

朝倉・広瀬古墳群

前方後方墳としては全国で4番目の大さである八幡山古墳（はちまんやまこふん）や、ヤマト王權とのつながりの証である三角縁神獸鏡（さんくわくぶらんじゅうきょう）が出土し、東日本最古の前方後円墳・前橋天神山古墳に代表される朝倉・広瀬古墳群は、かつて150基以上もの古墳がありました。残念なことに、住宅団地造成などにより、多くの多くが姿を消しました。右の写真は、山王金冠冨原古墳（さんのうかんかづかこふん）から出土した副葬品です。金銅製の冠は、新羅（しらぎ）式冠で、朝鮮半島の文化の影響が見られます。本古墳は、八幡山古墳・前橋天神山古墳に続き、本地域を支配した有力者の古墳と考えられます。



金鋼製冠(左)・循角付背(右上)・大帶(右下)
(東京国立博物館提供)



（右上）・大器（右下）

古代から続く「朝倉

下の写真は、元祐社蒼海（もとそうじやおうみ）跡群（116）の平安時代の井戸跡から見つかった瓦です。（「那波朝倉」と墨書きされています。大化元年（645）以降、徐々に律合体制が整えられ、全国は 60 余りの国に分けられました。現在の群馬県とはほぼ同じ範囲の上野国（こずくのくに）は、14 の都を管轄しており、上川潤地区は、那波郡（なわぐん）と群馬郡に含まれます。墨書き瓦は元々は上野国分寺に使われていたものと思われ、瓦に地名を記したのは、「朝倉」鄭が瓦製作に関与したか、貢納したことを表すためと考えられます。また、養老 4 年（720）成立の日本書紀には、大化元年に朝廷が派遣した東国等司に、本地域の有力者、朝倉君（あさくらのきみ）が対応したことが分かる記事があります。「朝倉」は、古からくんどく地名だったのです。

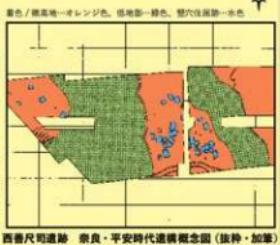


「(那)波郡朝倉」と墨書きされた平瓦
(元慶社古窯跡群 0101号井戸跡か心出土)

約2万4千年前	前輪島海が山体崩壊し、前輪主流が発生す	
3世紀後半 年頃	浅間山山噴火する。(浅間C雪舟石降下)	
4世紀 大化元年 (4世紀) 大宝元年 (701年)	大化革新が始まる。各郡に国司・郡司が置かれる。 大宝律令が制定され、国郡・里制が施行される。	
5世紀 和銅3年 (710年)	和銅6年 (713年) 養老6年 (720年) 延暦13年 (794年)	上毛野原を「野国」と改める。この頃、国府が形成する。 舍人親王(とねりしんのう)ら「日本書記」を著する。 平安京遷都。
天平元年 (729年)	天平元年 (729年)	浅間山噴火する。(浅間B軽石山降下)
文治元年 (743年)	源賴朝が守護・地頭の設置を認められる。	
永承4年 (747年)	モングルが襲来する(文承の役)。	
弘安4年 (751年)	再度、モングルが襲来する(弘安の役)。	
弘安5年 (752年)	前輪主流・安達川源流が一族と供に滅ぼされる。 足利義氏が征夷大將軍となる。	
建保元年 (753年)	結城合戦。上州白旗一族に安野周防守・ 長野左馬助が名を残す。 義政を殺す。享徳の乱が始まる。	
永享12年 (753年)	京都で応仁の乱がある。	
文明5年 (747年)	長尾景教、上杉氏に脅す。武藏五十子陣 (いからごじんじん)を立てる。 大木本 (752年)	
文明5年 (747年)	赤坂城(おうさかじょう)を攻める。 那須郡(なすぐん)・むねこしと・猪俣郡(いのまたぐん)・賀茂郡(かものぐん)を	
天文10年 (754年)	金屋城を攻める。	

古代の大規模集落

8世紀になると、律令制が導入され、前橋市元總社町付近には、上野國府（こうづけこくふ）・国分寺・国分尼寺が造営されました。前橋台地上では、微高地に集落、低地を耕作地帯にする「都市計画」的な開発が始まりました。右の図は、西善尺司（にしそんしゃくじ）遺跡の奈良・平安時代の遺構概観図（抜粋・加筆）で、西番尺道跡・奈良・平安時代遺構概観図（抜粋・加筆）（日本復興文化財審査委員会「奈良・平安時代遺構概観図」）



環濠屋敷

前橋台地には、環濠屋敷（かんごうやしき）と呼ばれる、四辺を堀で囲んだ中世屋敷が集中的に分布していました。「群馬県の中世城館跡」の調査委員、山崎一氏によると、多くの縄張り図が作られ、周知されています。環濠屋敷の堀には、水を引き込むための溜瀬（かんがい）機能と敵や洪水に対する防衛機能の2つの働きがありました。堀の方向は、古代の桑地里割の影響を受けていると考えられます。前橋長瀬線バイパスや北関東自動車道の道路工事に先立つ発掘調査では、今まで存在を知られていなかった屋敷跡が見つかっています。



図で囲んだ武士の館（模型）
(国立府立美術館所蔵)



中沢屋敷：坐主庭に深い間わりがある。
(群馬県教育委員会「群馬県の中世城館跡」)

上州白旗一揆

鎌倉時代に北条氏の守護任臣であった西関東には、守護クラスの大名が存在せず、中小の領主が割据していました。これらの領主達は一揆を結び、連合体として結城合戦や享徳の乱など様々な合戦に参陣しました。上野の一揆は上州白旗一揆（しらはたいき）と呼ばれています。文明8年（1466）、長尾景春（ながおかげはる）が主の関東管領・杉頸定（あさだ）に反旗を翻すと、一揆（上野中央部の一揆）旗頭（はたがしら）の長野為業（ためなり）は、景春方として活躍しました。この為業を旗頭長野氏の初代とする説もあります。

厩橋長野氏と那波氏

戰国期、上川瀬地区は厩橋長野氏と那波氏の支配下にあったと推定されます。厩橋長野氏は真輪長野氏と同族で、厩橋城を築きました。西善町の祝昌寺は、厩橋長野氏の建立とされています。那波氏は、源頼朝の側近、大江広元の子孫にあたります。当時の資料には「那波ノ都主」と見られます。両氏は、関東管領内山杉氏の被官でしたが、後北条氏の上野進出に伴い内山杉氏が没落すると、後北条氏にいました。永禄3年（1560）、越後長尾景虎は上野に侵攻すると、親北条派である那波氏の居城、赤石城（伊勢崎市）を攻めました。その後、厩橋長野氏は景虎の旗下に属していましたが、陣中で起きた暴れ馬を謀反と誤解され、誅殺されます。那波氏は嫡子を人質に出し降伏し、那波頼は戦功のあった新田金山の横瀬氏に与えられ、厩橋城には越後北条氏（きたじょうし）が置かれました。

源平合戦終盤の頃、朝廷から源頼朝に東国への支配権を認める宣旨（せんじ）が下されました。頼朝の伊豆流人時代からの側近、安達盛長（あだちもりなが）が上野國奉行人（守護の地位）となり、子孫も代々、上野国の守護に任命されました。玉村町角瀬には「安達屋敷」の伝承地もあり、同地の武、玉村氏は安達氏の被官となっています。鎌倉幕府第8代執権、北条時宗（ほうじょうときむね）を外戚として支えた安達泰盛（やすもり）は、元寇の際、御恩奉仕で務めました。令和3年に国宝に指定されることになった『蒙古襲来絵詞』（もうこしゅうらいえことば）（宮内省保管）には、肥後の御家人、竹崎季長（たけざきすえなが）の蒙古合戦での先駆けの功の訴えを開巻が描かれています。時宗の死後、泰盛は、北条得宗家（とくそうけ）の執事、平頼嗣（たいいらのりつな）との対立により、霜月騒動（しもつきそどう）で一族と共に滅ぼされ、以後、北条得宗家が上野國守護となります。



泰盛（左）に蒙古合戦の報功を訴える季長（中央）
(群馬県教育委員会「群馬県の中世城館跡」)



「甲斐少弔上杉謙信入陣輝政」
(群馬県立美術館デジタルコレクション)

（昭和48年
～1968年）

前橋市元志方に由来する「前橋市元志」という地名が、前橋市元志から「一萬町近い畠金」前橋市元志正が完成する。大政奉還。

前橋市元志方に由来する「前橋市元志」という地名が、前橋市元志から「一萬町近い畠金」前橋市元志正が完成する。大政奉還。